



庄吉  
中嶋宏太郎



幸太  
嵐芳三郎



おもん  
浜名実貴



おせん  
今村文美



渡会元之



早瀬栄之丞



黒河内雅子



北澤知奈美



横澤寛美



西川かずこ



藤川矢之輔



田中世津子



津田恵一



和田優樹



嵐市太郎



玉浦有之祐



忠村臣弥



上滝啓太郎

### 前進座 山本周五郎上演記録

(初演年)

1962年	こんち午の日
1964年	季節のない街
1968年	ながい坂
1970年	雨あがる
1975年	さぶ
1977年	扇野
1977年	柳橋物語
1978年	あすなろう
1980年	梅咲きぬ
1981年	夜の辛夷
1985年	つゆのひぬま
1987年	赤ひげ
1989年	わたくしです物語
1990年	青べか物語
1992年	深川安楽亭
1996年	かあちゃん
1997年	地蔵〜イカサマ地蔵騒動譚
2012年	おたふく物語

〈あらすじ〉  
江戸茅町にある杉田屋の職人・幸太と庄吉は、どちらも腕も良く人柄もいい。研ぎ職人の源六の孫娘・おせんは、どちらにも近しさと親しさをもっていた。  
だが、杉田屋の跡取りは幸太に決まり、失意の庄吉は上方へ修行に旅立つ。別れ際、「一人前になって帰るまで待っていてくれ」と、おせんに言い、「待っているわ。庄さん」と、答えたそのひと言が、おせんのそれからの一生をきめてしまった。  
その後、杉田屋からおせんを幸太の嫁にほしいと言ってきたが、祖父の源六は断ってしまう。貧乏人の意地からであった。  
間もなく源六が卒中で倒れ、江戸は大火事に見舞われる。この時、かけつけた幸太は源六とおせんを助けようと力の限りたたかいたが死んでしまった。「おせんちゃん、生きるんだぜ、諦めちゃあいけない」と叫んで――。  
ひとり残され、一切の記憶を失ったおせんは、飢えながらさ迷い歩く――。火事のなかで拾った赤ん坊をしつかり抱いて――。

庶民の生きるための苦しみ悲しみも、喜びも楽しさも、すべてがここにある。苛酷な運命と愛の悲劇に耐えて、人間の真実を貫き、愛をまっとうした江戸庶民の恋と人情を描いた山本周五郎の名作が今、よみがえります。

# 柳橋物語

題字 朱海慶

### 感想文(前回の公演より)

◇感動しました。  
愛をつらぬくむつかしき、けなげなさに胸をうたれました。人のうわさが与える影響の大きさを改めて認識し、自分も知らず知らずに人を傷つけていないか、気をつけなくてはと思わされました。

◇真実の愛とは何か。また、それを見極める事の難しさを考えさせられた。

江戸の大火の時、武家屋敷の門が閉ざされ逃げ場を失った庶民が次々と焼死していく。一つの世も、庶民は権力者の犠牲になつていふと思つと腹がたつた。しかしながら、焼け跡の中からたくましく立ち上り、生活をしていく民衆や、時には陽気に時にはいじわるしながら、しかし団結していく長屋の人々に、底力や明るさが感じられた。

◇本で読んだ柳橋物語は、お芝居としてどのように表現されるのか、初めはその程度の見方しか出来なかった。しかし、ただ良かった、涙が出ただけでは済まされない何かが残った。  
一番分かって欲しい人、心を知って欲しい人に聞いてもらえない苛立たしさ、悔しさがどんなに残念で辛かったらと思う時、おせんが哀れでならなかった。感情的になつていふ時にこそ感情のままに言葉を出してはいけない、心を鎮め話を聞く態度が必要ではないか、傷ついたおせんが他人の目より自分自身を信じた時、強くなれたと思つた。